

御挨拶

中村歌舞右衛門

皆様 本日はお暑い中をご来場下されまして誠に有難うございます。

「葉月会」は今年第十七回を迎えます。中堅・若手俳優並に邦楽若手の技芸発表の場として第十七回記念公演を開催させて頂けますことは、ひとえに皆様方の温かいご支援のお蔭様と先ずは厚く御礼申し上げます。

本年は葉月会が蓄積してまいりました制作のエネルギーを特に結集し、長年にわたって本会に誕生した舞台研究会議を母体として企画構成をはかり、ここに『美少年於夏聞書』を上演する運びになりました。舞台は滝澤馬琴の著名な読本「近世説美少年録」に材をえた歌舞伎の世話物としてご覧頂きます。多くのご指導ご協力によりますことは申し上げるまでもございませんが、殊に国立劇場の絶大なご支援によりますことをあらためて一同と共に厚く御礼申し上げる次第でございます。

また舞踊は「花競葉月舟」をご覧いただきます。

藤間勘十郎師には引き続き振付をたまわり、重ねて暑中にもかかわりませぬお稽古をつけて下されました事は一同にとりまして身にあまるご鞭撻でございまして、この場ではございますが心より厚く御礼を申し上げます。

このように身にあまるご支援を頂戴して稽古を続けております修行中の者ばかりでございます。一同の稽古熱心にめんじて、どうぞ年に一度の舞台を見てやって下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

なお、毎夏の開催にあたり惜しみなくお力添え下さいますご指導の諸先輩をはじめ、関係者各位、とくに日本芸術文化振興会・国立劇場の皆様には心より御礼申し上げたく、この機会にご挨拶申し上げます。

平成十年八月

(伝統歌舞伎保存会会長)

第十七回 葉月会 国立劇場大劇場

歌舞伎青年俳優
歌舞伎邦楽若手 研修発表会

第十七回記念上演

葉月会舞台研究会議企画構成

滝澤馬琴 読本『近世説美少年録』より
持田諒 脚本

序幕 京三条町お夏家の場

(木戸口の場)

(表座敷の場)

(元の木戸口の場)

半年後の秋(木戸口の場)

(表座敷の場)

(元の木戸口の場)

二幕目 洛西深草村別離の場

木曾山麓街道裏の場

木曽山山賊棲家の場

弁財天境内茶店の場

泉州堺吾足斎内の場(竹本連中出演)

三幕目 同 裏土手の場(同)

藤間勘十郎=振付

二花競葉月舟

清元連中

平成十年八月二十日(木)

十一時三十分

開演

主催

後援

日本芸術文化振興会

葉月会舞台研究会議企画構成

瀧澤馬琴 読本『近世説美少年録』より

持田 諒 脚本

美少年於夏聞書 四幕七場

人は木石にあらず、いなむと思う花の心に、さそう流水の情けやさしく、ひと夜香夢穂やかに——「美少年録と登場人物」の冒頭、大町桂月のたおやかな一文である。かぶき踊りの名花笛屋お夏が、若侍の瀧十郎と亭主の留守に一夜を過ごした恋を好色といえども、過ちといえども過ちであつたろう。だが、お夏は愛のない夫婦を認めず、女とらず。操に背けども眞実の愛情に生きた。だからこそ、山賊の二人妻となりながら必死にしての恋に生きた。その後はその恋に命をかけたのである。淑女とは言えないが毒婦にあらず。操に背けども眞実の愛情に生きた。だからこそ、山賊の二人妻となりながら必死に一子朱之介を守りぬき、木曾山中から脱出できたのである。これを、人倫に背いた子育てといえばそれまでである。お夏は状況の中で常に眞実に生きぬいた。それは、哀れではあるが実際に果敢に生きた女性であった。瀧澤馬琴が描きたかったのもこの女の一途な姿であった。やがて成長した一子朱之介と再会した時この生き方と若き世代の朱之介との生き方の衝突は意外の展開となつたが原作は未完作品に終わつた。舞台化の原動力もこの激突の立體像化にあります。どうぞごゆるりとご覧下さい。

序幕 京二条町お夏内の場

笛屋お夏歌江	陶(すえ)瀧十郎紀義	末松屋女房おさき蝶次郎	植久娘お里佐藤雅志	ならず者猪弥三宇貫貴雄	同卒八八田端俊	ならず者植久光紀	植木屋植六	女中およし時蝶	池澄屋鮎九郎紫若
--------	------------	-------------	-----------	-------------	---------	----------	-------	---------	----------

かぶき踊り華やかな京の町。弥生の末。

夕立がひとしきり強くなつた。陶瀧十郎は、あわてて近くの軒をかり、見事な枝振りの松の木陰で雨をしのいだ。

「お侍さま、そこでは濡れますえ」と、生け垣の内より女の声。そこは笛屋お夏の家であった。お夏は、かぶき踊りの一座の頭をつとめ、琴・三味線・胡久の三絃に長じた人気芸人であった。

瀧十郎は、周防(すおう)の国大内義興公の家老の嫡男、正しき家柄で京都へ着任したばかりであった。この出会いから、若き瀧十郎と舞姫お夏との間に、激しき恋が生まれた。

○ ○ ○

序 幕 —— 秋 ——

○ ○ ○

この恋を、庭先から盗み見をしたのが大家の若旦那

鮎九郎だった。お夏に岡惚れの鮎九郎は、焼き餅を妬きながら表へ出ると伊勢からお夏を尋ねてきたおさきとばつたり。聞けばおさきは、お夏の亭主の木偶介のほんとの女房だという。木偶介（でくすけ）は伊勢の大商人の主人だったが、かぶき踊りの芸人お夏の美貌に入れ揚げて駆け込み亭主をつづけているという。

鮎九郎はおさきを慰め、木偶介さんは明日ここにいるから尋ねるように言い聞かせて見送った。鮎九郎の心に瀬十郎に難癖をつけ、お夏をこらしめようという逆恨みの企てが生まれていた。

いつのまに落ち葉も積もり、——京は秋になつた。
お夏・瀬十郎の恋にも秋の気配が漂ってきた。瀬十郎の耳に木偶介のことや、鮎九郎のよからぬ噂が入ってくる。この夜を最後に別れを告げるべくお夏の家に忍んだ瀬十郎に思いも掛けない言葉が飛び込んだ。
「瀬十郎さま、夏は御子を身ごもりました。」
瀬十郎は思い言葉を背負いながら家を出ようとした時四人のならず者に囮まれた。鮎九郎の子分だった。峰打ちの刃が誤って菰六の背に入りどつと血汐が吹き出した。瀬十郎は、しまったと目を瞑った。
とりつくろうお夏の言葉を背に、ともかくも瀬十郎は逃げた。郷里の父母の顔が思い浮かんだ——一つがなく勤めを大事にしあわせよ——厳格な家老の父の言葉。京。雨やどり。春の宵。美酒——瀬十郎の脳裏に浮かんだ一夜の出来事は、夢幻となつて消えていった。

二幕目 洛西深草村別離の場

笛屋	お	夏	歌	江
陶（すえ）	瀬十郎	紀	義	江
見送り	役人	宇貫貴雄		
見送り	役人	八田武也		
末松屋	木偶介	錦一		
辛踏	无四郎	吉次		

京都追放。国表勢居という厳罰が瀬十郎に下った。追放の場所は深草であった。所へかけつけたのが、友人の辛踏无四郎だった。

“からふみむしろう殿”と瀬十郎はびっくりした。勤番所の知友である。无四郎はさらに瀬十郎を驚かせた。乳飲み子を抱えたお夏もきていたのだ。古式に則り瀬十郎は珠之介の手に入れ墨の割印をなした。

心配で後をつけてきた木偶介はこの様子をじっと見ていた。「お夏、鎌倉へ行つて稼ぎ直そう」とまで、云う夫だった——。

木曽山麓街道裏の場

笹屋お夏歌江
末松屋木偶介錦一
ぬばたま黒三光紀助
とどき夜行太駒助

木曽山山賊棲家の場

笹屋お夏歌江
末(すえ)珠之介佐々木宏太
夢の中瀬十郎紀義
ぬばたま黒三光紀助
とどき夜行太駒助

山深かき街道裏——急ぐ余り木偶介はお夏をこんな淋しい道へ連れてきてしまった。これが過ちだった。

赤子は敏感である。泣き止まぬ声をききつけていつの間に夜行太と黒三という木曽山中で名うての山賊に捕まつた。

山賊にとってお夏ほどの美人は掛けがえのない獲物だった。

反対に木偶介は殺された。冬山に赤子はいらない。珠之介があわや殺されかけた時、母お夏の必死が夜行太をひるませた。世にも稀な「相合い妻」の構図が生まれたのはこの時だ。

お夏は地獄を見た。しかし、瀬十郎の一子を救えるなら、それは武器だろうか。珠之介を抱きしめてお夏は女の覚悟を決めた。

山野を駆け、獲物を追って珠之介は成長していった。子供心に、夜行太も黒三も、父親でない事は分ってしまう。なぜ母上は、夜行太と黒三にあんなに尽くすのか。珠之介は聞ききたいと思つていた——その機会がある夜に訪れた。

寝静まった夜。そっと母から自分の生い立ちを聞き、珠之介は決意する。その企みはお夏をびっくりさせるに十分だった。それは珠之介に備わった超能力であった。

山賊がひた隠している猛毒の砒石。それで毒酒を作りあとはかくしかじかと——珠之介がお夏に耳うちした計画は山賊を相討ちさせる事であった。

成就の願いは現実となり、弁財天を信仰したお夏に、加勢した白い蛇の功德も得て、夢に見た地獄の脱出をお夏親子はついに手にした。山家に上がった火の手が下山する親子の頬を喜びに染めていた。

四幕目　弁財天境内茶店の場

末（すえ）	朱（あけ）之（の）介（すけ）	歌（か）江（こう）
吾足（よし）斉（せい）娘（むすめ）	晚（あた）稻（とう）	梅（うめ）之（の）丞（じょう）
乳（ちゆう）母（めい）	お（お）梅（うめ）	左（さ）升（のぼり）
ふ（ふ）み（み）売（うり）		
茶店（ぢゃてん）の娘（むすめ）		
参（さん）詣（ご）の人（ひと）		
参（さん）詣（ご）の人（ひと）		
参（さん）詣（ご）の人（ひと）		
女（め）す（す）り	お（お）と（と）り	
若（わか）先（せん）生（せい）	又（また）紫（し）若（わか）一（いち）	

泉州は堺の町。弁財天の境内——九年が経っていた。
 文壳の声——薬屋吾足斉の娘晩稻（おしね）の面瘡
 が見事に快癒したという。その陰で密談を重ねる男女。
 床几に背を向ける深網笠の浪人など、明暗とりどりだ。
 丁度お礼参りにやつてきたのはお晩稻とお梅。所が、
 おしねにスリがぶつかってきた。「何するんだい——」
 と怒るお梅。スリも負けてはいない——割って入った
 浪人が深網笠をとれば抜け出たような美少年であった。
 密談の男。女すり。おしね。深網笠浪人。この人間
 模様は謎めいたまま次幕へ運ばれる——知つてか知ら
 ずかおしねだけが、深網笠の少年に見とれていた。

泉州堺吾斉内の場

吾足斉妻（よし）おいそ実（み）ハ	末（すえ）	朱（あけ）之（の）朱（あけ）之（の）介（すけ）	歌（か）江（こう）
吾足斉娘（よし）せいむすめ	晩（あた）稻（とう）	梅（うめ）之（の）丞（じょう）	
乳（ちゆう）母（めい）	お（お）梅（うめ）	左（さ）升（のぼり）	
女（め）す（す）り			
若（わか）先（せん）生（せい）	又（また）紫（し）若（わか）一（いち）		
薬（くわ）屋（や）吾（よし）足（しゆく）斉（せい）	晩（あた）稻（とう）	歌（か）江（こう）	
神（じん）巫（みやま）女（め）す（す）り	右（う）お（お）京（きょう）梅（うめ）稻（とう）	梅（うめ）之（の）丞（じょう）	
薬（くわ）屋（や）主（しゆ）女（め）す（す）り	御（ご）影（えい）	左（さ）信（しん）梅（うめ）之（の）丞（じょう）	
薬（くわ）屋（や）の客（きゆく）女（め）す（す）り	上（じょう）條（じょう）岳（だけ）伸（のぶ）佐（さ）藤（とう）雅（まさ）志（し）	梅（うめ）之（の）丞（じょう）	
薬（くわ）屋（や）の客（きゆく）女（め）す（す）り	田（た）端（はた）安（あん）藤（とう）孝（こう）宏（ひろ）	佐（さ）藤（とう）雅（まさ）志（し）	
若（わか）先（せん）生（せい）	吉（よし）又（また）紫（し）若（わか）俊（とし）一（いち）	佐（さ）藤（とう）雅（まさ）志（し）	
薬（くわ）屋（や）吾（よし）足（しゆく）斉（せい）	田（た）端（はた）八（はち）田（た）武（たけ）也（や）	安（あん）藤（とう）孝（こう）宏（ひろ）	
	次（じ）一（いち）若（わか）俊（とし）	佐（さ）藤（とう）雅（まさ）志（し）	

面瘡は後に天然痘と呼ばれた難病である。この病に晩稻が罹った。吾足斉は窮するの余り賞金百両で拘神の妙薬を求めた所、朱之介と名乗る美少年が現れた。会うと少年は深草で別れた乳飲み子の球之介であった。しかもその家に母お夏が吾足斉の後妻として入っている。すれば吾足斉は義理の父。晩稻は妹。百両は全き他人への賞金額。そなたは親を救い、妹を助け、お夏にも会えたゆえ——と云い淀む吾足斉の背信を朱之介は許さなかつた。手を見るより早く吾足斉を斬り百両を奪つて逃げた——その時落とした印籠から下手人が朱之介と知り、お夏は晩稻を連れて後を追つた。薬問屋を相続したい晋三の企ても深網笠の朱之介に見破られた——晩稻は二重に救われていた。

竹本　淨瑠璃　竹本　葵大夫
三味線　鶴澤慎治

大詰同裏土手の場

吾足斎妻おいそ実ハ
お

六八

あけのすけ

歌江

と、お夏が晩稻を連れてきた。晩稻を晋二から隠してやりたい——見れば苦舟がもやつていた。

てやりたい——見れば芭舟かもやっていた

朱之介は土手伝いに逃げてきた。右京に分け前を渡すや早く逃げると急がせ自分は藪の中へ入つていった。と、お夏が晩稻を連れてきた。晩稻を晋三から隠し

若	御	捕	捕	乳	吾足	末
先	影	方	方	母	齐娘	(すえ)
生						
晋	右			お	晩	朱
三	京			梅	稻	之
又	信	田	宇	左	梅	介
一	之	端	貫	升	之	夏
		俊	貴		丞	
			雄			

竹本 淨瑠璃
三味線 鶴澤慎治
竹本葵大夫

作曲竹本葵太夫

入江の流れは早く、舟はすぐ海へ出た。
みよしに立ったのは晩稻であつた——と、ともから
さつと現れたのは他でもない、朱之介であつた——。
顔見合わせて二人は、沖へ沖へ向かつた。

顔見合わせて二人は、沖へ沖へ向かった。

さ」と現れたのは他でもない矢之介である。顔見合させて二人は、沖へ沖へ向かつた。

みよしに立つたのは晩稻であつた——と、ともから
さつと現れたのは他でもない、朱之介であつた——。
顔見合わせて二人は、沖へ沖へ向かつた。

藤間勘十郎 二 振付

花 競 葉 月 舟

船町町町年
頭娘娘娘增
吉紫梅左歌
之
次若丞升江

净瑠璃

三味線

上調子

清	清	清	清	清	清	清
元	元	元	元	元	元	元
美	雄	邦	志	磨	太	夫
三	二	朗	壽			
郎						

解說 清元寿国太夫作曲

藤間宗家振付による『船』を今回「葉月会」むけに新しく振付けて下された作品。勉強会の舞踊演目として登場したのは勿論初めてで出演者は勿論のこと、関係者一同感激して稽古に励んだ。盛夏のひとときをこの貴重な作品でお楽しみ下さい。

馬琴の心宇宙を泳いで

持田 謙

(脚本)

『近世説美少年録』は「前篇・(全三編)」と「後篇・新局玉子童子訓(全・巻三十)」に至る通して六十回の読本の物語である。文政十二年(一八二九年)より天保三年(一八三二年)までの刊行が「近世説美少年録」で弘化二年(一八四五年)より馬琴没年の嘉永元年(一八四八年)の刊行本が「新局玉子童子訓」で未完である。

脚本化に当っては国会図書館蔵「帝国文庫」版を全複写させていただき、一語一句をペンで囲みつつ読んだ。馬琴の筆息を自分の気の中に受けとめたかったからである。

応仁の乱以降の男寵の風習にも触れながら、神界・人界・魔界を自在に翔けるインドの二大叙事詩、を想い出させる筆の力は馬琴の深い博識を根としていて息もつかせぬ面白さである。物語は、応仁の大乱に入つてより四十数年経った永正・大永の頃を世界に、京の都の踊り妓「笠屋阿夏」(脚本ではお夏)と周防の国

主・大内義興の家老の嫡男「陶瀬十郎」という美青年との逢瀬を起点とする。主人公は二人の間に生れた美少年・珠之介(脚本では後の名・朱之介に統一)であるが、前篇では母となつた阿夏を丹念に追つている。

又、馬琴は物語の底に弁財天、即ち白蛇信仰をすえた。飛翔し化転し霧消し顕現する壮大で深淵な世界を「二時間の世話物」として——。それが条件であった。公家・武士・庶民、三層の時代のかけひきの面白さに取り憑かれたが、阿夏と朱之介に絞つた世話作品となつた。中村歌右衛門丈の一番弟子で現幹部の中村歌江丈と成島和男氏の歌舞伎造詣の眼力である。

着想より一年。連錦と続く。“馬琴宇宙”の中を懸命に犬かきで泳いだ感する。やつと小さな地球を発見した想いに至つたのは「山賊棲家の場」を書き上げた時である。二人の山賊に身をまかせても朱之介を守る阿夏の中に“梵”性と、朱之介の中に“存在”性の、宇宙の理に似たものを感じたからである。小さな影として感じとつていただけたら幸甚である。

炎暑、舞台創造に励む俳優・スタッフへの想いは熱いが、劇場に来て下さる観客の皆様への感謝はそれに倍するものである。

○……歌江さんが「三越名人劇場」に出演した。山川静夫さんの軽妙な司会に引き出されてかぶき形態模写を披露して喝采を浴びた。共演した山田五十鈴さんも笑いがとまらず、七月六日の劇場は爆笑の渦であったとか……。今年はお夏と朱之介の二役。美少年の下絵を書くなど意欲をのぞかせていた。

○……左升さんは「花井お梅」以来の出演。今でもあの常磐津師匠が話題になる。第2回の「どろどろ大師」の妙林が記憶にとどまるなど必ず役を評判にするのは実力のしからしむることろ、今年も楽しみな話題。

○……駒助さんが久しぶりに出演。体調もよく元気に歌舞伎座六月に復帰した。今度は山賊の「とき夜行太」がピッタリ?という評判に本人も喜んだり苦笑したり。「歌江さんを盛り上げよう」と木曾の山奥へお夏を虜にするが、最後は毒酒がもとで討ち死となる。「やはりお酒はいけません」

○……梅之丞さんは、珍しく七月歌舞伎座に出演「千本桜」を勤めた。稚魚の会では一期生の貫禄?十分に「角海老女房」を演じたり、葉月会では「娘おしね」で堺小町と評判の美人に扮したり、是も忙しい夏であります。

○……紫若さんは六・七月にわたつて「鬼平」の巡業に参加。

微笑年楽屋聞書

大候の不順もあって「長い旅でした」七月末に帰京。つづいて稚魚の会をお手伝い、葉月会では一役という勉強ぶりで、若旦那の鮎九郎、女スリのおとり、で活躍する。「高橋お傳」の立役の浪之助が好演でご記憶にもあたらしいでしょう。是も兄ものです。

○……又一さんが初出演——薬剤師の若先生晋三(しんぞう)は色仇という役どころ、又五郎さんの一門で紫若さんの弟になる。「鬼平」から発表会へ参加、今年は葉月会のみに絞つて奮演する。貴重な二枚目の資質に恵まれていて、もっと大役に恵まれることが望まれている。これからが楽しみ。

○……吉次さんは葉月会になくてはならぬ人になった。吾足斎延明という薬剤師は、「美少年」では重厚な大役である。いかに演ずるかはまた見ものの一つ。立師もつとめるので「木曾山」の相討ちの立ち廻りをいかに見せるか双肩にかかる。今年は名題試験に合格、歌舞伎会では「熊谷」を演ずるなど、よい年であります。

○……時蝶さんが初出演。『時播磨』で有名な三代目時藏さん以来のお弟子さんで、今や生き辞引的存在。と書くといかにも老けて恐縮だが、舞台の色気は十分、今回は援助出演ともいうべき女中「およし」で舞台を盛り上げる。序幕の世話物風は、よしで安心安心となるからさすがである。

新鮮な企画

——さて、「美少年」とは思い切った企画でしたね。

美少年の系譜は歌舞伎に伝統がありまして、ちょっとと
数え上げても、「妹背の久我之助」「熊谷の敦盛」「三
代記の三浦之助」と上げられます。

——白井権八、弁天小僧?

そうですよ、まだまだいます。馬琴翁がこの世界を見
逃す筈はありません。モデルは陶晴賢といわれていま
す。NHKドラマ「毛利元就」にも登場していました。

——しかも歌江の二タ役には驚きました。

前売りが始まった時、美少年を誰がやるのかという問
い合せが多くて、企画したこちらがびっくりしてし
まいました。

——しかも歌江の二タ役には驚きました。

——母親と子供、しかも少年を演するのは、葉月会
の歌江ならではですね。

喜んで下されば芝居作りの冥利です。きっと面白いで
すよ。

——いつ頃から瀧澤馬琴を企画線上に。

「里見八犬伝」があまりに有名なので馬琴といえば
「八犬伝」ときまたものですが、馬琴には舞台化に魅
力的な世界が充満しています。外部の脚本を仰ぐ時は
いつか馬琴を取り上げていきたいと念じていました。

舞台研究会議とは

昨年は竹柴止一さんに依頼して初めて外部脚本で公演
できました。原作は黙阿弥の「新累女千種花嫁」でし
たが、原本が現存していないのですから、去年の脚本
は書き下ろしといえます。そして、「新累」に登場し
た西入権之丞という人物が馬琴の『新累解脱物語』と
いう読本からきたものです。

——それが舞台研究会議ですか。

そうなのです。毎夏、葉月会が終わると翌日から来年
の話です。ああしたい、こうしたいという会話が、
楽屋で、部屋で、廊下でも始まります。あらためて会
議を開きますという触れがいらないのです。正式な会
議は、確認のためという実りが生まれて来ました。

映画でよくいう「何何組」というのがきっとそういうの
でしょう。

それだけに気をつけなければならぬ「独りよがり」
にはブレークをかけています。

——アクセルばかりではね。

仰る通りです。その会議の総合を「研究会議」として
今回の冠にしました。

——まさか歌江が?ですか(笑い)

のようでした。歌江がやりますというと、大抵の人が、
「えエッ?」でした。

——企画勝ち?

そういうふうに願っています。

十五年あまりの蓄積がいよいよ果実の段階に。

話題のトップは抜擢

そう願って一路邁進してきました。考えてみますと、役者の芝居をしたい、大劇場の舞台を踏みたいという

脇役の希望をよく汲んでくれました。そのお蔭で成長してきたスタッフが葉月会の中に自然生で生まれたのです。その麦芽が醸醉してきて醸造されたものの中から今回企画と構成が生まれました。

——脚本担当が先ずそうですね。

持田諒さんは長い間の葉月会の演出を手掛けてきて方で、今回は脚本の執筆に渾身の力を注ぎました。まず原本の「近世説美少年録」をみつけに国会図書館へ通ったところから始まりました。当たり前ですが、これが大変でした。なにしろ膨大な量ですから縁の下の苦労は立派な脚本として実りました。

——脚本担当が先ずそうですね。

——ところで「美少年」の一番の話題は？
まず、歌江が、相手役に澤村紀義を抜擢したことでしょうね。

——研修十期の紀義君。宗十郎さんのお弟子さんですね。

そうです。一枚目の陶瀬十郎に◎印をつけて届けたらまもなく電話がかかってきました。

もしかして、◎印のツケ間違いではないですか。

——何度も見直したのでしょうか。

歌江・幸右衛門のコンビできた葉月会ですからね。紀義君も、まさか相手役になるとは、思いもよらなかつ

たのでしょう。

——喜んだでしょう。いい企画ですよ。張り合いかれますよ、若手に。

機会があれば必ず稽古で巧くなると信じています。抜擢は勇断です。

——薬剤士というのは珍しい。

た。歌舞伎会では「熊谷」をやるなど、いい年ですよ。葉月会では「吾足斎延明」という薬剤師を演じます。
そうですね、青年時代は瀬十郎と同じ藩中の武士で、生まれが東北の薬屋だったという人物で辛踏元四郎と言います。

——瀬十郎は序幕のヒーローでしょう。

雨宿りが縁で結ばれるお夏・瀬十郎の愛がすべての事の始まりですから大きな主役です。

——幸右衛門さんは残念でしたね。

歌舞伎座の「おぐるす長兵衛」と「先代萩」につかまつては駄目でした。久しぶりの休演です。

——吉次さんが成長してきました。

そうです。中村吉次さんは今年名題試験に合格しまし

朱之助とは何者？

——“あけのすけ”とは一体どんな少年だったのでしょうか。

お夏には形ばかりの夫があった。その留守の一夜に真摯な恋をえて、身ごもった武士の胤である事は、朱之助を考える上で大きな要因です。

——お夏は武士に憧れていましたね。

「街道裏」のセリフに出ますが、武士に近づき上流階級へ出入りしたかったのは事実ですよ。だがそれだけではなかった。武士の世界の凛々しさに魅きつけられていた。なぜ凛々しさに魅かれるのか、よくお夏自身には自覚されていなかつたと思われます。

——凜々しくてお金になる？

まあそういうことです、女芸人からみて金で何でもありますよ。

——男だったら武将になっていた。
そうですよ。身分制のやかましい時代に武士に近づき恋をする気概は、内に何かを持つていなければ、なかなかできるものではありませんよ。男にしたいような氣風の持ち主。

——木偶介はそこがわからなかつた？

舞台では詳しく出来なかつたのですが、お夏の苦境を助けてそのまま亭主におさまつたのですから根っから

の商人だったのでしょう。

——町人が嫌いなのですよ、お夏は。吾足斎も薬剤師でしたものね。

なるほど。それは面白い見方ですね。それに吾足斎も元は武士でしたし。ともかく、瀬十郎のようになってほしいと願いつつ育てたのが朱之介です。

瀬十郎はハムレット型

——山賊の件は、かわいい子役で？

決して贅沢は出来なかつたにしろ、普通の境遇で育つていれば朱之介も平凡な少年に育つていたのかも知れません。それが木曽山中で成長し、山野をかけめぐり、鳥や獣を相手に大きくなれば、相当な少年が出来上がりますよ。

——「臉の母」のセリフを思い出しますね。

“ぐれたを言ふはそれは無理”ですか。

片づける商人の世界はもう嫌だった。道を求めている武士世界が凛々しく見えたのも当然ではないでしょうか。女なのに、対等感があるのに驚かされます。

——優れた芸の持ち主でした。

三味線、琴、胡弓をこなし、踊りがうまいのですから一流のトップでしょう。

中国地方の周防（すおう）といえば当時は大内義興公。そこの家老の坊ちゃんで京勤めになり、入洛したのが弥生三月の末ということになります。その若侍が雨や

どりをして美貌の芸人笛屋お夏に誘われるのですから、

瀬十郎の若氣の過ちばかりを責めるわけにはまいりません。

——白い蛇がからみます。

瀬十郎は生まれながらに蛇嫌い。これに大内家の菊地攻めがからむのでこの小説には、白い蛇がよく出でています。

——その辺を少し詳しく。

肥後の菊地が反乱を起こしたとき、足利將軍の命を受けて攻めた総大将が大内義興公でした。その時、大内軍が菊地家の守護神の蛇の祠を焼き払ったので、後に、参戦した將兵に蛇が祟り、白蛇の幻影に脅えるという後遺症が残った。

——幕あきに植木屋が言っているのが、それですか。

そうなのです。

——となると、お夏があやしい。
そういう演出もあったでしょうね。原作の読本ではあきらかにお夏は蛇の化身のように書かれていますが、白蛇伝は今回は避けました。

馬琴と黙阿弥

——現代仮名で読みやすい「美少年録」も出でています。

大変な力作で、もう翻訳のようですね。二百年にならないのに現代語訳が貴重です。

——上・下で出版されていて、長いものですね。

膨大な作品です。岡本綺堂さんが「馬琴・黙阿弥」を「二大巨匠」と呼んでいるのも、二人とも三百以上の作品を書き残した驚異を讚えているのでしょうか。この「美少年」にしても、前編が『近世説美少年録』・後編に『新局玉石童子訓』という構想ですからね。しかし、『新局玉石童子訓』といふ構想ですからね。しかし、残念ながら未完で終わっています。(馬琴は八十二歳で亡くなっている)

——むずかしい問題ですね。

ではこのへんで――。

——瀬十郎は参戦していたのでしょうか?

肥後へは行っているのですが、この蛇焼きには病氣と偽って加わっていない。

——加わっていない?

そうです。だから幻想に脅える筈がない。

そういう演出もあったでしょうね。原作の読本ではあきらかにお夏は蛇の化身のように書かれていますが、白蛇伝は今回避けました。

——その魔力にひきいれられて座敷へ上がってしまった。

そういう演出もあったでしょうね。原作の読本ではあきらかにお夏は蛇の化身のように書かれていますが、白蛇伝は今回避けました。

——では「近世説美少年録」は原文の文語体の方を。

原文の日本語はこうも違うのかと思われる程現代の日本語とは違います。あれを読むと、黙阿弥は非常に現代に近いですね。たった五十年ですが、馬琴の生きた江戸と黙阿弥の江戸とは非常に質的に違う世界を感じます。どうもあの五十年の間に日本語が大きく変わることかがあったと思います。馬琴が亡くなったとき、黙阿弥は三十歳代です。

——戦後五十年の比ではない。

まるで違います。馬琴はやはり十八世紀の人、黙阿弥は近代の人といつていい位。あの五十年の間に生じていた変化は、ただの量の差ではないと思います。

平成9年8月20日

写真集

新累女



与左衛門
吉 次

権之丞
幸右衛門

吉次さんの成長が著しい。と幸右衛門さんの貫禄も又ついてくるから不思議である。小芝居は、こういう風に面白く、味わい深く、人気を得ていったのではないかと想像します——きっと。権之丞は後半が幸右衛門。入り婿で住みこむや親仁の与左衛門を殺し金を奪う。吉次さんの与左衛門がいくら縋りついても、見下す姿をとくとご覧下さい。幸右衛門も又久しぶりの時代世話で本領?発揮か。この悪の美を存分に見られるのが葉月会ならではなのだが。

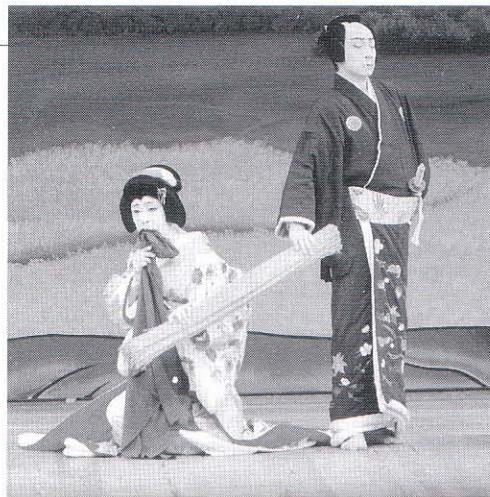


累
歌
江

名草との恋が発覚して追放された権之丞は浪人の末、生き写しの累と所帯を持った。悪人の芽生えはここからか。そつくりな累を千葉家へ売り込もうといふ魂胆。うまくいった狂言も側室の証に贈られた稽古を羽織った途端、累にわざわいが——憑依の世界。累物語の核心である。累か、名草か。歌江が久しぶりに演じた時代世話の舞台は成駒屋系の伝統を如実に演じた。黙阿弥のざんぎりが続いた後だけに水を得た?舞台。掛け声も「成駒屋ッ」。

(そういえば「加賀屋ッ」が懐かしい——)

千種花嫁



腰元名草
歌
江

西入権之丞
左十次郎



権之丞=左十次郎
腰元名草=歌
江

千葉正胤=紀
義
腰元吳竹=吉
次

珍しい吉次さんの女形——腰元吳竹は「鏡山」岩藤だ。意欲が十二分にこの写真に溢れている。

試合に勝った名草に褒美の襷襦を手渡した西入権之丞に左十次郎さん。葉月会の若手も大いに成長したもので研修九期・十期ともなると、歌江さんの抜擢に応えて立派に相手役を勤めた。

千葉の殿様に扮した紀義さんが、今年の「美少年」で陶瀬十郎に出演、是もまた抜擢に応えている舞台はご覧の通りである。若手の勉強は著しい。納得いくまで台本を読む。当たり前だが積み重ねは大きい。

昨年の舞台から

写 真 集

新累女

千種花嫁



累
歌 江

祐天上人
寿 鴻

初出演の尾上寿鴻さんの祐天上人が立派でした。押し出しのよさ、写真の通りです。

うやうやしく拌む累の顔からは、あの

忌まわしい痣は消え、呪われた榊楠も虚空に飛び、晴々とした累の美しい顔。

——評して「今年の葉月会も無事に終わったという気持ちが顔一杯に現れています」とは言い尽くした言葉でした。あの嬉しさは成駒屋風の芸を身体一杯に表現できた満足感でもあったと思います。黙阿弥が続いたこの数年の葉月会一さて来年は? と言っている内にもう今年も満員の夏。

来年も本シリーズでお目にかかる事を祈ります。



累
歌 江

権之丞
幸右衛門

気づいた時、累は遅かった。父さんが出掛け帰らない辻棲を権之丞に咎めても知らぬ存ぜぬの一点ばかり「えイッ、やかましいわえ」のセリフが聞こえてくるようだ。そう思い返せば十二年前、葉月会の「身売りの累」で売り出した歌江・幸右衛門のコンビ誕生以来の累・与右衛門である——そうですか十二年前? お一人は異口同音に応えていました。宗十郎の「身売りの累」が出ました。時は移りてこの六月に歌舞伎座で梅玉・「新累女千種花嫁」もいつの日か歌舞伎座にかかるのでしょうか——楽しみです。

宗十郎の「身売りの累」が出ました。

「新累女千種花嫁」もいつの日か歌舞伎座にかかるのでしょうか——楽しみです。

資料館

○：原作者・瀧澤馬琴は明和四年の生まれ（一七六七年——一八四八年没）嘉永元年に八十二歳で亡くなつた。

お馴染みの河竹黙阿弥が一八一五年・文化の生まれだからほぼ五十年の先輩にあたる。黙阿弥は三十歳代に馬琴と同じ空氣を吸つたかと思うとある感慨が沸いてくるが、馬琴の芝居嫌いは記録に残つてゐる。

馬琴は「近世説美少年録」を前編とし「新局玉石童子訓」を後編として構想していたようで、この「童子訓」が未完に終わった。今回の『美少年於夏聞書』は主に前編の「近世説美少年録」を劇化したものだが、「吾足斎」の場は「童子訓」の一部である。

○：歌舞伎は多くの「美少年」が人気を得ている。義経をはじめ多くの稚児や世話の弁天小僧など、若衆伝説は多いのにこの末朱之介（すえあけのすけ）は芝居に登場していない。

モデルは陶晴賢（すえはるかた）といわれ大内義興公の寵をうけた人物で有名。葉月会では瀧澤馬琴の

世界を早くから狙つていたが時期尚早の感があつた。昨年より脚本をスタッフに求めてみた試みの二度目の試金石として今回馬琴の脚色に踏みきつた。

○：脚本の持田諒氏は葉月会の舞台演出でお馴染みのスタッフの一員で今回の長編を書き上げた。原作は室町末期の京都が舞台だが、研究会議の結果、江戸世話物に統一してもらひ、台詞も演出も江戸世話物になっている。実録風なら所謂新作歌舞伎だがキャラクター、音楽、舞踊などすべて時代考証に基づいた演出が要求され、それは全く次元を異にする制作となる。

○：劇中の吾足斎という役は薬剤師だが、瀧澤馬琴が自ら製薬・販売も行っていた程の「薬好き」は余り知られていない。ひとつには、妻の病弱、息子の病気がちから自然薬に造詣が深くなつたという話しても伝わっている。山賊殺しの「砒素石」や吾足斎の薬剤師など、薬に関する情報が豊富だった実生活を読本に活かした背景は眞実のようだ。

作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	長 唄 望 月 忠 哲 行 郎	三味線 柏 伊 伊 三 治	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	今 藤 佐 太 藏	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
頭 取 稔 野 吉	長唄指導 望 月 太 左 之 助	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
子役指導 望 月 太 左 之 助	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場
作 調 望 月 太 左 治	鳴 物 望 月 光 竹 次	附 師 稀 音 家 政 吉 次	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場	美 術 国立劇場</td

○：昭和四十年三月一日に社団法人
伝統歌舞伎保存会が誕生した。

初代会長に市川寿海、ついで左團

次、團十郎、中車、羽左衛門、梅幸、
仁左衛門、歌右衛門、勘三郎、又五
郎、三津五郎、幸四郎が理事。松緑、
芝鶴、勘弥が監事に就任した。

会員は九十名。現役俳優三二〇名
の時代、舞台歴二十年以上の名題が
選ばれ、重要無形文化財・団体の指
定を受けた。

是が第一次指
定と呼ばれる。つまり個人文化財と
区別されており、伝統的な江戸歌舞
伎を再現できる団体が本義である。
「伝統」とは女優ではなく女形である
事を条件として当時の前進座歌舞伎
と峻別された。

○：市川寿海会長は記者会見の席上
「むかしは古老たちが厳しくしつけま
した。舞台にいても棧敷に聞こえる
くらい小言を言ったものですが、そ

れがいい意味の励ましになつたもの
です。わたしは、これが美しい
“封建”だというのですがー」と述
べている。

その年の秋に国立劇場が開場し、
やがて俳優養成事業が昭和四十五年
に発進した。

○：昭和四十七年、歌右衛門会長に
よる現体制がスタートし、やがて歌
舞伎邦楽が認定され竹本・長唄・鳴
物が入会、後に狂言作者も入会
した。現在一五三名である。

養成事業は拡大し竹本・鳴物コー
スが開始された。こうして古典歌舞
伎の上演・養成事業の二本柱にもう
一本、本会主催の「研修発表会」が
発進したのが昭和五十七年であった。
これが「葉月会」と命名され稚魚の
会・歌舞伎会と並んで本年で十七回
を迎えている。

編集後記

○：馬琴を世話物風に舞台
化した狂言ゆえ夢幻世界は
原作を読んで頂くとして本
誌は舞台制作の情報収拾に
つとめた。勉強会も世代交
代？が始まっている証左は、
発会当時の若手は熟成し、やがて
次代の主役へタッチする今回の抜
擢によく新世代が応えた舞台でわ
かる。祝福だ。

○：三宅坂トナリの永田町が騒然。

マスコミが伝える歌舞伎座の建て
替えなど転換期の足音が聞こえる。
「発表会」にも新しい波が寄せて
きよう。新世纪に備えて葉月会精
神の確認と視座の再点検を行って
いる。（成島）

発行 平成10年8月20日
〒102-0092 千代田区隼町4-1 国立劇場
社団法人 伝統歌舞伎保存会
葉月会
編集部 成島和男
（3265）7411番
印刷所 ハイビジネス